

河川におけるアメニティの変遷に関する研究 — 京都鴨川の納涼床を対象として —

The Study on the Transition of Design in the River-front

田中尚人^{*1}・川崎雅史^{*2}・山田圭二郎^{*3}・牧田 通^{*4}

by Naoto TANAKA, Masashi KAWASAKI, Keijiro YAMADA and Toru MAKITA

1. 研究の背景と目的

京都の鴨川では古くから、この暴れ川の治水と並立して、「納涼床」に代表されるような親水の機能が治水上の必要条件を満たしつつ保たれてきた。その姿は、治水や利水を目的とした河川改修とともにいくたびかの変容を経てきたが、都市と水辺、人が水に親しく接する基本的な関係は長年に渡り変化していないものと思われる。そこで本研究では、納涼床を中心とした鴨川の景観の歴史的な変遷を、河川改修との関わりから考察し、河川の備えるべき本来的な機能を強化しながら、人々が鴨川に求めてきたアメニティを保持してきた土木技術の一つの知恵を探ることを目的とした。

鴨川の納涼床を対象とした文献としては、建築的な視点から納涼床を分析した山崎らの報告¹⁾がある。本研究の特徴は、納涼床等を含むアメニティの成立基盤となる河川景観を、建造物や景観要素の変遷だけでなく、これまであまり焦点の当たらなかった治水や利水による河川改修との関わりから論ずるところにある。このような、治水や利水に注目した河川におけるアメニティの研究の先駆けとして、戦前の鴨川の改修工事における環境計画の理念の高さを指摘した松浦・島谷らの研究^{2) 3)}の意義は高く、本研究もこれに負うところが大きい。

本研究では歴史的な文献や資料^{4) 5) 6) 7) 8) 9)}、絵図・写真等、ヒアリング調査をもとに、納涼床を中心とした河川景観の変遷の全体像を概観するため調査し、また納涼床が出されるみそぎ川¹⁰⁾との関わりについても考察を行った。

2. 鴨川の空間的構造の変遷

本章では、鴨川の空間的構造を歴史的に把握するために、築堤や浚渫等の主要な河川改修の歴史を、京都府京都土木事務所、京都府立総合資料館等より収集した、『京都市水害史』¹¹⁾や鴨川の治水に関する文献資料^{12) 13)}から整理し、鴨川四条河原付近の河道断面の変化を図-1のようにまとめた。

鴨川の空間的構造に大きな影響を与えた河川改修には以下の4つがある。

キーワード：景観、親水計画、空間整備・設計

*1 学生員 修士(工) 京都大学大学院 工学研究科 博士課程
(〒606-8501 京都市左京区吉田本町 TEL & FAX 075-753-5123)

*2 正会員 博士(工) 京都大学大学院 工学研究科 助教授

*3 正会員 修士(工) 京都大学大学院 工学研究科 助手

*4 学生員 京都大学大学院 工学研究科 修士課程

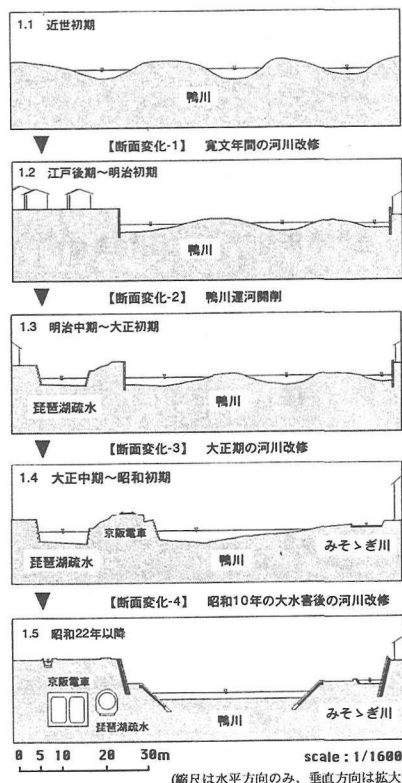


図-1 鴨川四条河原付近の河道断面の変遷(筆者作成)

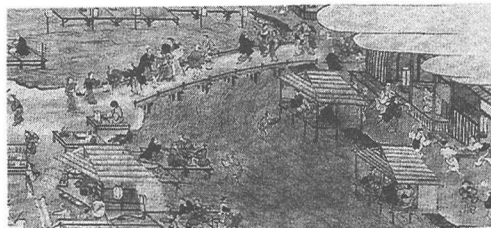


図-2 『芭蕉翁絵詞伝(義仲寺)』
(「京の歴史と文化5 洛朝廷と幕府」¹⁶⁾より)

(1) 断面変化-1 【図-1.1 → 1.2】

寛文年間の河川改修 幕府により寛文9年(1669)鴨川筋新堤(寛文新堤)の築造が始まり翌年竣工した。北は二条から南は五条に渡る両岸に、1700年前後に描かれた『芭蕉翁絵詞伝』(図-2)に見られるような石積み護岸が築かれ、河道の整形、河床の浚渫

等が行われ、それ以前は不明瞭であった川幅がある程度固定されると同時に狭まり、河原と市街地の区分が明確となった。また、これが契機となって現在の祇園や先斗町へとつながる地区等が形成された。

(2) 断面変化-2 【図-1.2 → 1.3】

鴨川運河開削 明治23年(1890)4月に完成した琵琶湖疏水が鴨川への流入部にて分流、冷泉通りより南下して鴨川と並走する鴨川運河が完成したのが、明治27年(1884)9月であった。大正4年(1915)には京阪電鉄の五条～三条間の開通とともに、三条通り以南の鴨川左岸に桜並木が植樹された。

(3) 断面変化-3 【図-1.3 → 1.4】

大正期の河川改修 明治後期から大正期、昭和初期にかけて鴨川は比較的安定しており洪水の被害は軽微とされている。そして明治後期から京都の都市化は急速に進展し、一連の河道改修の結果、河床の浚渫、低水路内の中洲の除去、右岸に高水敷が築造され流れが一つにまとめられた。また、みそぎ川の発生もこの時期と考えられる。

(4) 断面変化-4 【図-1.4 → 1.5】

昭和10年の大水害後の河川改修 昭和10年(1935)6月、前年9月の室戸台風による被害の復旧工事も十分でなかった鴨川を集中豪雨が襲い、同年8月にも洪水の被害を受けた。京都市の27%が浸水し、死傷者・行方不明者74名、全壊・半壊・流失家屋675戸¹⁴⁾、堤防決壊284ヶ所、橋梁の流失57橋、のいわゆる「鴨川大洪水」であった。この大水害後の災害復旧は、河床を約2m程度掘り上げ、55カ所の床止め工、10m程度の河道の拡幅や、橋梁架設が行われ、改修工事の竣工は戦後の昭和22年(1947)となった¹⁵⁾。

3. 納涼床の形態の変遷

納涼床は今日見られるような形態となるまでにはいくつかの変化が見られた。本章では、納涼床が発生した近世初期からの文献や資料、絵図・写真等、また納涼床を出している先斗町界隈の店舗に対して行ったヒアリング調査をもとに、納涼床の配置の変遷を前章の鴨川の空間的構造の変遷と併せて整理し(図-3参照)、形態の変遷について考察した。

(1) 納涼床の発生以前

鴨川は古来より暴れ川として有名で、その流路は不特定であり、兩岸に荒涼とした河原が形成されてきた。この河原は、時に合戦の場ともなり、衆庶往来の広場的な性格を持つ場となっていた。室町時代の鴨川の河原を描いた絵図に『洛中洛外図(町田家旧蔵本)』(図-4)があり、そこには河原と市街地には明確な区別のない様子が見てとれる。

河原の広場化は近世に入ると豊臣秀吉による京都改造等の影響で著しくなり、寛永年間(1615-44)の賑わいの様子を描いた『四条河原図』(図-5)では、河原は専ら歌舞伎の興業地と化していた。

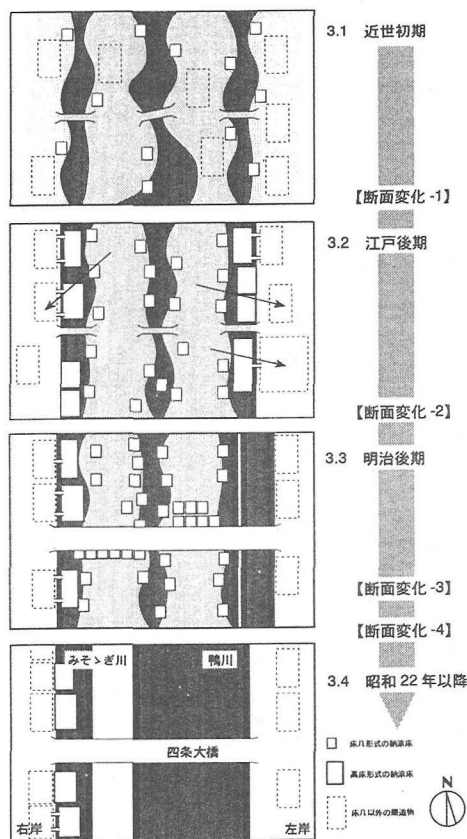


図3 納涼床の配置の変遷(模式図 筆者作成)



図4 『洛中洛外図(町田家旧蔵本)』
(「京の都市意匠—景観形成の伝統」⁵⁾より)

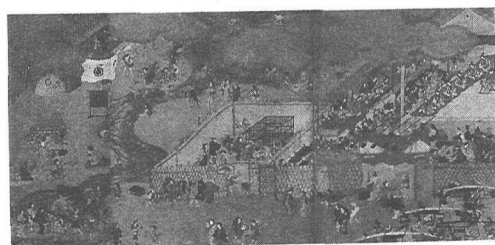


図5 『四条河原図』(「京都古地図散歩」⁶⁾より)

(2) 納涼床の発生— 床几形式 —

a) 床几形式の納涼床

「四条河原涼み」として祇園会の期間である6月7日から18日まで期日の定められた年中行事であった四条河原の納涼における発生当初の納涼床の形態は、『賀茂川納涼図』（図-6）などに描かれ、現在とは大きく異なり水面との距離が非常に近く、持ち運びが可能な床几形式のものであった。設置場所も中洲や水際、時には川の中と河原全体に渡って並べられていた（図-3.1参照）ことが分かる。床几形式は、当時の人々の技術力からすれば、無理に常設の装置をつくるのではなく、持ち運び可能な装置で水辺を楽しむという、しなやかな考え方を具現化した納涼の工夫と言えよう。



図-6 『賀茂川納涼図』
（『京の都市匠匠— 景観形成の伝統』^{5）}より）

(3) 納涼床の確立— 高床形式・床几形式 —

a) 高床形式の納涼床

寛文年間（1661-72）の河川改修後（断面変化-1）石積みの護岸ができたことで、河岸（堤防）と水面との距離が以前より大きくなり、足の長い束柱を持つ高床形式の納涼床が河岸から張り出されるようになった。この様子は『芭蕉翁絵詞伝』（図-2）に描かれている。

b) 区分化による配置の変化

寛文年間の河川改修後、護岸により河原と市街地が明確に区分化された四条河原周辺では、歌舞伎小屋等の常設的な店舗は安全な堤内地へ移り、河原には茶屋や的矢等の仮設的な店が納涼床とともに次第に増えていったと考えられる（図-3.2参照）。この時期の様子は、安永9年（1780）の『都名所図会』（図-7）等に見ることができる。

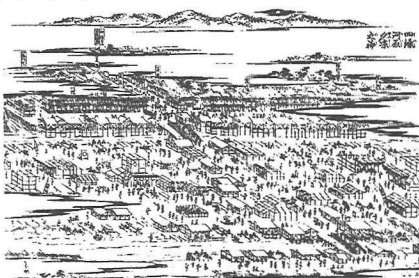


図-7 『都名所図会』（『都名所図絵を読む』^{9）}より）

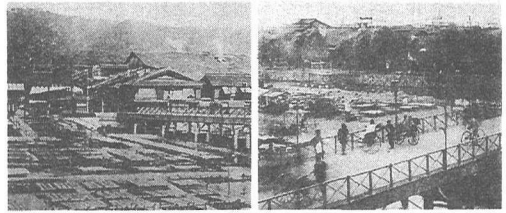
c) 期間の延長

年中行事であった四条河原の納涼は、本居宣長の『在京日記』にも「後涼み」の記述が見られように

¹⁶⁾、江戸中期のある時期から祇園会の期間を過ぎても8月1日までは納涼の期間が延長され、明治期になると納涼床は、7～8月の2ヶ月間出されることが定着した。これは、納涼床の一般民衆への定着を示すものであろう。明治10年（1877）の写真（図-8）には、河原一面に床几形式の納涼床が置かれていた様子が写っている。

d) 左岸の納涼床の消失

盛況をほこっていた四条河原も、鴨川運河が開削（断面変化-2）されると、左岸から出されていた高床形式の納涼床は姿を消し現在のように、右岸からのみとなった（図-3.3参照）。運河開通以前の明治25年（1894）の写真（図-9）では、左岸から高床形式の納涼床がいくつか出されていた様子が分かる。



左) 図-8 明治10年 四条大橋上流右岸から東南隅を見る
（『京都慕情』^{8）}より）

右) 図-9 明治25年 四条大橋下流右岸から東北隅を見る
（『写真集成京都百年パノラマ館』^{4）}より）

(4) 大正・昭和初期の納涼床— 高床形式 —

a) 床几形式の納涼床の消失

大正期の河道改修（断面変化-3）の結果、中洲が取り除かれ、流速も速くなった河道内に直接納涼床を出すのは危険であると、床几形式の納涼床が禁止された。また、右岸には高水敷を設けることが計画されたが、鴨川の流れが遠のき、納涼床が出せなくなることを憂えた木屋町・先斗町の店々が、大正6年9月28日「夏の納涼床下に清水を通ずるなどの設備されし」と京都府に陳情した¹⁷⁾。結局その陳情が実を結び、右岸の高水敷の最も堤防寄り、河岸の建物のすぐ脇にみそぎ川が開削された。

b) みそぎ川の誕生

元来この「みそぎ川」の名称は、中州によっていくつにも分けられていた鴨川の流れのうちで、最も右岸寄りの流れであつたらしく、人々に親しまれてきた水辺だったのであろう。明治期・大正期の治水を第一の目的とした河川改修の中でもみそぎ川は、鴨川の余剰水排除（治水）、高瀬川舟運への水の安定供給（利水）、納涼床の存続（親水）など、都市の人々の生活に潤いを与えるアメニティの基盤施設として誕生したのであった。

c) 景観としての納涼床

みそぎ川の誕生以後、鴨川の右岸にはお茶屋、料亭などが、高床形式の納涼床だけを出すようになったが、二階建てや思い通りの屋根をつけ、形状が不揃いで不体裁を極めた。この不体裁な納涼床の景観を整えるため大正12年（1923）『鴨川河川敷一階占用並びに工作物施設の件』が通達され納涼床の基準

が規定された¹⁸⁾。このような納涼床に対する一種の景観規制は、納涼床がそれ以前の鴨川や東山を「見る」ための装置的な性格に加え、まとまった群として鴨川という河川景観の構成要素として重要な意味を持つ「見られる」対象となったことを示している。

d) 納涼床の接続方法の変化

昭和10年(1935)の大水害以前の納涼床は店舗とは小橋によつてのみつながれる形態をとっていたが、これは洪水時に納涼床は流されても、店舗までと一緒に流されてしまうことを防ぐ設計であった。小橋による納涼床と店舗との接続方法は、洪水という自然の驚異が人々の力では如何ともし難かった時代のしなやかなフェイル・セーフの設計思想として評価に値する。現在は、納涼床の店舗側の一辺を全て密着させる接続方法が主流である。この変化には、種々の原因が考えられるが、昭和10年の大水害後の河川改修(断面変化-4)により鴨川の河床が下げられ、流量や流速の調節が可能となったみそぎ川に納涼床が出されるようになった影響が大きい(図-3.4参照)。

(5) 現在の納涼床

昭和10年の大水害後も66軒の店から張り出されていた納涼床は、太平洋戦争による灯火管制のため禁じられ、終戦時には全く影をひそめてしまった。

戦後になり、昭和25年(1950)に数軒が納涼床の設置を出願したが、戦後の反動として鴨川の風致を破壊するようなものが多く出た。このため翌昭和26年(1951)4月から京都府議会で協議会がもたれ、同年5月には許可基準を示した『鴨川の高床について』の通達が出された。さらに翌昭和27年(1952)許可基準の検訂が行われ、同年5月『鴨川納涼床について』の通達が出された。その後今日に至るまで許可基準の正式な変更はなく、現在、納涼床の期間は6月1日から9月15日までの約3ヶ月間で、平成10年(1998)には52軒の店が納涼床を出した。

4. 結論

本研究では、歴史的な資料や文献、絵図や写真、ヒアリング調査等をもとに、納涼床の形態と鴨川の空間的構造の関係を図-10のように整理できた。

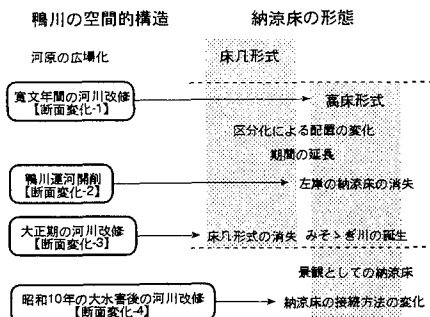


図-10 納涼床の形態と鴨川の空間的構造の関係

『洛中洛外図(町田家旧蔵本)』(図-4)の描写には人影さえ見つけることができないが、文政9年(1826)の『四条河原図』(図-5)になると、広場化した河原に人々が大勢押し寄せている。そして『賀茂川納涼図』(図-6)に描かれるように、床几形式の納涼床の出現により、人々は以前にまして思い通りに河川との関わりを求めるようになった。

寛文年間の河川改修により『芭蕉翁絵詞伝』(図-2)に見られるような護岸が築造されると、やがて高床形式の納涼床が出されるようになり、『都名所図絵』(図-7)に見られるような盛況を呈した。明治27年(1894)の鴨川運河の開通により、左岸側から高床形式の納涼床は消失し、大正期の河川改修により床几形式の納涼床は姿を消したが、東山や祇園の街並みを背景に、鴨川を俯瞰景として眺めることができる納涼床の盛況ぶりは現在へと至る。

謝辞 本研究は多くの方々にご協力をいただいた。京都大学大学院工学研究科中村良夫教授には貴重な御指導を賜った。京都大学大学院工学研究科水工学分野の村本嘉雄教授、細田尚助教授には鴨川の治水史に関する貴重な資料、アドバイスをいただいた。京都府京都土木事務所の中川様には文献資料の収集に関して多大なる御支援をいただいた。そして、鴨涯保勝会会長の森川良彦様や先斗町・木屋町で納涼床を出しておられる店舗の方々にはヒアリング調査に非常に協力的に応じていただいた。ここに深謝の意を表す。

参考・引用文献、補注

- 1) 山崎正史：鴨川と町なみ景観、京都市都市景観整備ローカルプラン調査報告書、京都市計画局、1989.3
- 2) 松浦茂樹：戦前の鴨川改修計画における環境面の配慮、第7回日本土木史研究発表会論文集、pp.275-286、土木学会、1987.6
- 3) 松浦茂樹・島谷幸宏：水辺空間の魅力と創造、pp.91-95、pp.186-196、鹿島出版会、1987.12
- 4) 吉田光邦監修・白幡洋三郎ら編：写真集成 京都百年パノラマ館、淡交社、1992.7
- 5) 山崎正史編：京の都市意匠―景観形成の伝統、PROCESS Architecture 116、1994.4
- 6) 伊東宗裕編：京都古地図散歩、別冊太陽 SUMMER 1994、平凡社、1994.9
- 7) 田中泰彦ら編：京都慕情、京を語る会、1974.8
- 8) 生田耕作編著：鴨川風雅集、京都書院、1990.12
- 9) 宗政五十緒編：都名所図絵を読む、東京堂出版、1997.3
- 10) 鴨川右岸の高水敷を流れる人工の小川の名称、京都府：鴨川及高野川改修計画並に鴨川改修に附帯する事業計画、1938.7 にて初見
- 11) 京都市役所：京都市水害史、1936
- 12) 村本嘉雄：河川と都市の歴史―京都鴨川の水害と治水、河川、(社)日本河川協会、1992.6
- 13) 中島暢太郎：鴨川水害史(1)、京都大学防災研究所年報第26号、B-2、1983
- 14) 京都府：昭和十年六月二十九日鴨川未曾有の大洪水と舊都復興計画、1935.11
- 15) 建設省近畿地方建設局編：淀川百年史、pp.605-607、1974.10
- 16) 村井康彦編：京の歴史と文化5 洛朝廷と幕府、pp.203-236、講談社、1994.7
- 17) 京都府：京都府百年の年表 7 建設・交通・通信編、1970
- 18) 大正12年6月14日京都府議会議決
京都府土木建築部河港課：鴨川の変遷、pp.11-13、1958.9